

# 日本歯科新聞

2011年(平成23年)

8月23日

## 歯髄細胞保管で 難病治療に協力

埼玉・まつざき  
歯科クリニック

鶴見大学や日本小児歯科学会、再生医療推進機構らが、難病を抱える子供の乳歯から歯髄細胞を採取して将来の治療・治療法開発のために保管する事業に、「歯髄細胞研究バンク」がある。難病と認定されている遺伝性疾患、進行性骨化性線維異形成症(FOP)の患者が来院したことから、埼玉県北本市のまつざき歯科クリニック院長の松崎哲氏は、同事業と連携して細胞保管を始めている。

### 研究バンクを活用

FOPは、200万人 骨格筋における異所性骨に1人の有病率。全身の骨化が特徴とされ、病態の



保管のため凍結された歯髄細胞。1500万個ほどまで培養した後、検査を経て保管される(写真提供:再生医療推進機構)

進行に伴い靱帯や腱などが癒合して自立的な歩行が困難になる。また、異所性骨化は顔面にも及ぶとされ、開口障害や嚥下障害を伴う症例も認められる。

骨化を防ぐ治療法は確立されておらず、メカニズムの解明や治療法開発に期待がかかっている。

病状が悪化しないか不安を抱えながら受診する患者を見て、松崎氏は「何かできることはないか」と思っている最中、同事

業を知る。

再生医療推進機構と連携をして、FOP患者から採取した歯髄細胞を培養し、無事に保管に至っている。

「再生医療は、従来の方では困難な難病治療に貢献し得る、可能性を秘めた最先端医療技術」と語る松崎氏は、「今後も再生医療推進機構や全国の研究所、製薬会社などと連携して、難病メカニズムの解明、治療創薬の開

発に協力していく」と話してくれた。